

【論文】

学びの鏡としての受講者感想

— 明星大学の初年次教育「自立と体験1」（2010～2016）の9,270例は何を語るか —

落合一泰*

**Students' impressions as a mirror of learning:
What do 9,270 questionnaire answers of the Meisei University first year education (2010-2016) tell?**

Kazuyasu Ochiai*

【要旨】

著者は、2010年度～2016年度の明星大学初年次教育「自立と体験1」の受講後アンケート計9,270例について年度別テキストマイニングを行い、そのデータに基づき、新たな友人の獲得や非認知能力の向上について受講生が肯定的な反応を示していると推定した。

【キーワード】

明星大学初年次教育、非認知能力、学期末アンケート、テキストマイニングと分析論

Abstract:

The author examines 9,270 terminal questionnaire answers of the first year education (2010-2016) compulsory for the new students at Meisei University, Tokyo. He uses a text-mining software to understand the students' evaluation of the class and concludes tentatively that the acquisition of new friends and non-cognitive skills in the class is positively recognized by the students.

Keywords: Meisei University first year education, non-cognitive skills, terminal questionnaire, text-mining and analytics

1. 本研究の背景—認知能力から非認知能力育成への重点変化

2008（平成20）年3月、中央教育審議会大学分科会制度・教育部会は、高大接続の観点から、教育上の「円滑な移行」や「大学生になること」への支援を「初年次における教育上の配慮」として大学に求めた¹。そして、各大学の努力の結果、2013（平成25）年には、わが国の大学の94%が何らかの初年次教育を実施するに至った²。また、2015（平成27）年1月16日に文部科学大臣が決定した「高大接続改革実行プラン」³では、高大接続の過程においては、「『知識・技能』のみならず、『知識・技能を活用して、自ら課題を発見し、その解決に向けて探究し、成果等を表現するために必要な思考力・判断力・表現力等の能力』（以下「思考力・判断力・表現力」という。）や主体性をもって多様な人々と協働する態度（以下「主体性・多様性・協働性」という。）などの真の学力の育成・評価に取り組むこと」を、「本プランにおいて重視する視点」とした。

* 明星教育センター 常勤教授

Professor, Meisei Education Center, Meisei University. Email: kazuyasu.ochiai@meisei-u.ac.jp

注目されるのは、「真の学力」として、思考力、判断力、表現力、主体性、多様性、協働性等、非認知能力を列挙している点である。わずか7年の間に、ユニバーサル段階に到達したことで生じた多様性ある高等学校教育課程修了者の学士課程教育への「円滑な移行」や「大学生になること」への支援から、非認知能力を重視する「真の学力」観へと、同じ高大接続という用語のもとで変化があったのである。

そして、その観点から、大学教育において、『学生が何を身に付けたか』を重視し、各大学における取組を推進するため、認証評価制度について、学修成果や内部質保証（各大学における成果把握と改善の取組）に関する評価を推進する」としている。すなわち、次期の認証評価においては、非認知能力にかかわる教育実践、測定を含めたその成果の把握、教学現場でのPDCAサイクルの稼働状況等を重要な評価項目とすることが予想されるのである。

以前から実施していた大学も含めても、わが国の初年次教育の歴史は概して浅い⁴。学生の学習力の多様性や教育憲章、建学の精神、教育方針等の相違を反映し、その内容も大学ごとに異なっている。大学間で学生の学習力が多様化しているだけでなく、同一大学入学者の間で入学時学習力に幅が生じていることも、初年次教育の内容に影響を与えている。山田礼子は、2007年度の国公私立大学1980学部を対象とする調査において、初年次教育を①スタディ・スキル系、②スチューデント・スキル系、③オリエンテーションやガイダンス、④専門教育への導入、⑤教養ゼミや総合演習など学びへの導入を目的とするもの、⑥情報リテラシー、⑦自校教育、⑧キャリア・デザイン、と定義し、実施状況について回答を求めた。その結果、山田が先行的に実施していた2001年度調査に比べ、③①⑥④が定着し、⑤⑧も正課内での初年次教育として位置づけられ、②⑦の割合が下がったことが分かった⁵。全学的に統一された初年次教育「自立と体験1」を2010年に開始した明星大学の場合、この科目は、下記の「教育目標」や「到達目標」、また表1が示すように、広範な非認知能力の意識的開発に学生自身が取組み、図書館の利用法やプレゼンテーション・スキル等に関わる①、学生生活の基本としての②、明星大学の歴史や特色に関する⑦、キャリア観形成に向けた⑧等の習得や向上に努め、大学生としての出発点の確立を目指す授業と位置付けられていると理解できる。

初年次教育に関する調査研究は、今後、教育者による教育成果測定と学習者自身による学習成果評価の両面から行われていくであろう。本論は、そのスタート段階として初年次教育の「受講者感想」が何を物語るかの類推を試み、今後の検討のための素材を提示することを目的としている。用いるデータは、明星大学が入学直後の前期(4月～7月)に必修科目として実施する初年次教育「自立と体験1」の受講者アンケートに含まれる、「質問3」への自由記述回答の2010年度～2016年度分である⁶。

2. 資料

2016年度の「自立と体験1」では、一年生約2,000人を30人ないし36人からなる65の学部・学科横断クラスに分け、この授業を統括する明星教育センターが準備する共通教科書（ポートフォリオ）と共通教案を用いて、明星教育センター及び学士課程を持つ7学部の総計50名を超える専任教員が授業を実施した。

2016年度に学生に配布されたポートフォリオの冒頭には、次の説明がある⁷。

「【キーワード】

・明星大生になる ・学部・学科を超えた交流 ・自己理解 ・卒業後の自分 ・学生生活のデザイン

【授業科目の教育目標】

この授業の教育目標は、「明星大学に学ぶ学生としての自分を理解し、各自の理想や目的を明確にしていくこと」です。明星大学の教育目標は「自己実現を目指し社会貢献ができる人の育成」（自分の夢の実現に向けて努力し、他の人のために役に立つことのできる人を育てること）ですので、この授業を通して自分の理想や目的を明確にし、社会貢献への道筋を探してください。」

表 1 明星大学初年次教育「自立と体験 1」の「授業計画・概要」(2010 年度～2016 年度)

授業回	テーマ	2010 年度	2011 年度	2012 年度	2013 年度	2014 年度	2015 年度	2016 年度
1		オリエンテーション	オリエンテーション	オリエンテーション	オリエンテーション	オリエンテーション	オリエンテーション	オリエンテーション
2		新しい環境で他者と出会う (明星大学でやってみよう)	新しい環境で他者と出会う (明星大学でやってみよう)	新しい環境で他者と出会う	新しい環境で他者と出会う	新しい環境で他者と出会う	新しい環境で他者と出会う	新しい環境で他者と出会う
3	「人と関わる」	他者と接し交流する (大学の印象・感想)	他者と接し交流する (大学の印象・感想)	大学での学びを考える	大学での学びを考える	大学での学びを考える	大学での学びを考える	大学での学びを考える
4		課外活動を知る (1)	聞いて相手を理解する (1)	聞いて相手を理解する (1)	聞いて相手を理解する (1)	聞いて相手を理解する (1)	聞いて相手を理解する (1)	聞いて相手を理解する (1)
5		課外活動を知る (2)	聞いて相手を理解する (2)	聞いて相手を理解する (2)	聞いて相手を理解する (2)	聞いて相手を理解する (2)	聞いて相手を理解する (2)	聞いて相手を理解する (2)
6		図書館にふれる (合同授業)	図書館にふれる (合同授業・ローテーション授業)	明星大学を知る (合同授業・ローテーション授業)	明星大学を知る (合同授業・ローテーション授業)	明星大学を知る (合同授業・ローテーション授業)	明星大学を知る (合同授業・ローテーション授業)	明星大学を知る (合同授業・ローテーション授業)
7		大学の施設にふれる (合同授業)	大学の施設にふれる (合同授業・ローテーション授業)	明星大学を紹介する (ローテーション授業)	明星大学を紹介する (ローテーション授業)	明星大学を紹介する (ローテーション授業)	明星大学を紹介する (ローテーション授業)	明星大学を紹介する (ローテーション授業)
8	「人と関わる・学びのスタートを切る」	マナーについて考える	課外活動を知る (合同授業・ローテーション授業)	図書館にふれる (合同授業・ローテーション授業)	図書館にふれる (合同授業・ローテーション授業)	図書館にふれる (合同授業・ローテーション授業)	図書館にふれる (合同授業・ローテーション授業)	図書館にふれる (合同授業・ローテーション授業)
9		私の通う大学を知る (合同授業)	私の通う大学を知る (合同授業・ローテーション授業)	大学職員に取材する (ローテーション授業)	大学職員に取材する (ローテーション授業)	大学職員に取材する (ローテーション授業)	大学職員に取材する (ローテーション授業)	大学職員に取材する (ローテーション授業)
10		自分や相手の大切さを知る (1)	自分や相手の大切さを知る (ローテーション授業)	自分や相手の大切さを知る (ローテーション授業)	自分や相手の大切さを知る (ローテーション授業)	自分や相手の大切さを知る (ローテーション授業)	自分や相手の大切さを知る (ローテーション授業)	自分や相手の大切さを知る (ローテーション授業)
11		自分や相手の大切さを知る (2) (合同授業)	ルールとマナーを考える	ルールとマナーを考える	ルールとマナーを考える	ルールとマナーを考える	ルールとマナーを考える	ルールとマナーを考える
12		卒業生から学ぶ	卒業生から学ぶ	卒業生から学ぶ	卒業生から学ぶ	卒業生から学ぶ	卒業生から学ぶ	卒業生から学ぶ
13		卒業後の自分をイメージする	仕事と自分について考える	仕事と自分について考える	仕事と自分について考える	仕事と自分について考える	仕事と自分について考える	仕事と自分について考える
14	「大学生活を見通す」	大学生生活をデザインする	大学生生活をデザインする	これから的大学生生活を描く	これから的大学生生活を描く	これから的大学生生活を描く	これから的大学生生活を描く	これから的大学生生活を描く
15		まとめ	未来の自分へのメッセージ	未来の自分へのメッセージ	未来の自分へのメッセージ	未来の自分へのメッセージ	未来の自分へのメッセージ	未来の自分へのメッセージ

それに続く「学生の行動目標／到達目標」には、次の記述がある。

「学生の行動目標／到達目標は、『他者との関わりを通して自己理解を深め、明星大学で学ぶ自分自身を理解すること』です。多様な学部・学科に所属するクラスメートとの交流を通して、様々な角度から自分自身をみつめ、自分の理想や目的を明確にしていきます。授業に休まず出席し、異なる考え方に多く触れることで、自分なりの考えをまとめることができるようになります。」

この2016年版ポートフォリオに登場する「キーワード」「授業科目の教育目標」「学生の行動目標／到達目標」は、2010年度の科目設置以降、不変である。他方、「授業計画・概要」欄が示す全体構成は、表1に見るように、更新されてきた⁸。たとえば、開講の翌年の2011年度には、「明星大学を紹介する」「大学職員に取材する」「仕事と自分について考える」「未来の自分へのメッセージ」など新たなアイデアが盛り込まれ、開講時から重要な授業と位置づけられてきた「自分や相手の大切さを知る」には、時代の認識変化に応じ、「キャンパスハラスメント」という言葉が2015年度に付加された。

このような更新の土台にあるのは、15回の授業を「人と関わる」「人と関わる・学びのスタートを切る」「大学生活を見通す」という3テーマで構成するという、当初から継続する全体デザインである。すなわち、「自立と体験1」の教育目標は「明星大学に学ぶ学生としての自分を理解し、各自の理想や目的を明確にしていくこと」で一貫しており、それを可能にする非認知能力の向上を15回の授業において目指していると理解される。

明星教育センターは、「自立と体験1」の最終回授業（15回目）において、末尾の10分程度を利用し、各クラスで選択式と記述式の無記名受講者アンケートを紙媒体で実施している。その目的は、受講生の授業への反応を次年度の授業改善に役立てることにある。

この受講者アンケートは、13項目について4件法で選択肢回答を求める「質問1」、「ためになった」と思う授業回を選ぶ「質問2」、そして自由記述回答を求める「質問3」と「質問4」から構成されている。「質問3」では授業の感想を求め、「質問4」では、さらに学びたいテーマを尋ねている。回答時間不足のためか、「質問3」への回答に比べ「質問4」への回答は数分の一にとどまっている⁹。

表2は、「自立と体験1」開始の2010年度から2016年度に至る各年度における、「自立と体験1」受講生総数および最終回アンケート調査の自由回答（質問3）に何らかの記述を残した受講生数（実答者数）を示している。7年間の実答者は、合計で9,270人である¹⁰。受講者から集められた「質問3」への手書き回答は、毎年度、アンケート回収直後に明星教育センター事務室が、クラス担当教員ごとにエクセルに転記して一覧化している。本研究では、年度ごとにそのデータから空欄回答を除去し、実回答のみを分析対象とする¹¹。

表2 「自立と体験1」の受講生感想における実答者率の変化

年度	受講登録者数 (N)	アンケート実答者数 (n)	実答者割合 (n/N)
2010	2,092	965	46.1%
2011	2,151	1,321	61.4%
2012	2,021	1,383	68.4%
2013	2,141	1,459	68.1%
2014	1,989	1,272	64.0%
2015	2,187	1,369	62.6%
2016	2,160	1,501	69.5%
合計	14,741	9,270	64.9%

本論では、2010年度から2016年度に至る「自立と体験1」受講者感想というデータについて語彙の出現頻度や相関関係を分析し、今後の仮説作成作業に寄与するであろうルールやパターン、類似性などについて推定し把握すると

いう、探索的データマイニングを行う。本研究では、分析者の予断を排すべく計量テキスト分析専用の KH Coder をテキストマイニングソフトウェアとして用い、データの特長を探ることに努めた¹²。

3. 分析結果

各年度のデータについて KH Coder の語彙自動抽出によるデータマイニングを行った結果、頻出 150 語の一覧表、品詞別の頻出語一覧表、名詞・サ変名詞・形容動詞・同市・形容詞に注目して語と語の結びつきを探る共起ネットワークの表示を得た。

3. -1 出現頻度の高い抽出語

表 3 は、各年度において出現頻度の高かった 30 語を示している。この表では、「自立と体験 1」が創始された 2010 年度について、データに登場する出現頻度上位 10 語を太字ゴシック体で、11 位～30 位を細字明朝体で表示した。そして、2011 年度～2016 年度において、2010 年度の上位 10 語がどのような順位に変化するかを示した。

表 3 から観察しうることのひとつは、2010 年度に出現頻度の高かった 10 語のほとんどが 2016 年度まで上位を占めており、とくに 1 位～3 位にはほとんど入れ替わりがない点である。2011 年度と 2012 年度に「学科」という語が「意見」に代わってトップ 10 に入り、2013 年度には「大学」という語が「意見」と、2014 年度には「話す」「グループ」が「他」「意見」と入れ替わっている。しかし、2015 年度のトップ 10 は 2010 年度に立ち戻っており、2016 年度は、「グループ」だけが「他」に代わってトップ 10 入りしている。このように、7 年間に 1 度でもトップ 10 入りをしたことのある語は 14 語に過ぎず、激しい入れ替わりは見られない。

「授業」は、7 年間にわたり出現頻度トップを占めている。これは、各年度の感想文に「この授業は」で始まる文章や「役立つ授業だった」で終わる文章等が相当数あることと無関係ではないだろう。「人」や「他」のような一文字名詞も多数登場している。これらは、「他人」のような複合語としてではなく「よい人だった」、「他との」のように使われている。

トップ 10 に入れ替わりが少ないという枠内で、注目すべき変化が推認される場合がある。

そのひとつは、表 3 の下段に記したように、集計した文の数 (A) を集計したセルの数 (B = 実答者数) で除した値、すなわち実答者が質問 3 への回答として記した文の平均数が、2010 年度の 2.00 から 2016 年度の 3.19 まで、増加傾向を示している点である¹³。一文の長短や回答者ひとり当たりの平均回答時間に変化があったかどうかも含め、より精緻な分析を経なければならないが、その 7 年間における学生の取り組み姿勢の深化を反映している可能性はある。

表 3 の数値からは、それぞれの語の出現率の変化を見ることが出来る。「楽しい」「良い」は、トップ 10 から落ちたことのない語だが、その出現回数を集計単位の文の数で除した値、すなわちその年に集計された文すべてにおけるその語の出現率は、2010 年度にはそれぞれ 13.2%、7.1% だったが、2016 年度には 9.8%、4.9% へとそれぞれ減少している。逆に、これも常にトップ 10 にある「自分」そして 2010 年度には 17 位だった「グループ」の出現率については、2010 年度のそれぞれ 7.9%、2.8% から 2017 年度にはそれぞれ 14.5%、5.2% へと大きく増加していることが分かる。

厳密な検証を待つべきだが、現時点での限られた観察からは、この授業の「楽しさ」が減じたというより、その「楽しさ」が話し合いのなかで自分を知る、あるいはグループワークで何かを作り上げるという楽しさや喜びの中に溶解してきた可能性が推察できるかもしれない。「良い」という語については「良い授業」「受講して良かった」のような使い方が、より言葉を尽くした表現に置き換わり、結果として直接使用される頻度が低くなったと推定できるかもしれない。

それに対し、年を追うごとに、「自分」を知ることの重要性の認識が受講生の間で強まってきている傾向が、上記

表3 各年度の受講生感想において出現頻度の高かった30語

順位	2010年度		2011年度		2012年度		2013年度		2014年度		2015年度		2016年度	
	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
1	授業	473	授業	856	授業	884	授業	1050	授業	865	授業	956	授業	967
2	人	456	思う	626	人	766	人	849	人	797	人	806	人	885
3	思う	425	人	616	思う	632	思う	792	思う	645	思う	705	思う	707
4	楽しい	348	楽しい	448	学部	522	学部	630	学部	576	自分	595	自分	693
5	学部	317	学部	376	楽しい	495	楽しい	617	自分	553	学部	577	学部	554
6	自分	209	自分	357	自分	472	楽しい	456	楽しい	426	楽しい	438	楽しい	471
7	良い	187	交流	236	交流	241	交流	288	交流	229	良い	278	グループ	249
8	交流	160	他	205	他	240	他	220	話す	178	交流	224	良い	234
9	他	140	良い	198	学科	168	良い	213	グループ	177	他	198	意見	232
10	意見	127	学科	145	良い	149	大学	198	良い	176	意見	192	交流	215
11	出来る	123	意見	127	話す	147	考える	197	他	175	関わる	187	大学	214
12	学科	103	コミュニケーション	121	グループ	139	グループ	192	考える	168	グループ	186	関わる	204
13	友達	96	学ぶ	119	意見	136	体験	179	知る	166	知る	180	考える	192
14	色々	81	大学	118	コミュニケーション	133	学科	169	大学	163	大学	178	話す	179
15	先生	80	友達	109	考える	132	話す	167	関わる	148	話す	167	コミュニケーション	174
16	大学	75	話す	105	大学	128	意見	165	体験	146	体験	159	知る	173
17	グループ	74	出来る	104	関わる	126	学ぶ	164	コミュニケーション	128	出来る	156	他	169
18	考える	73	考える	102	先生	126	知る	160	出来る	127	考える	150	体験	166
19	話す	70	関わる	101	体験	126	関わる	158	意見	125	自立	138	ワーク	160
20	友達	66	受ける	98	知る	125	出来る	149	学ぶ	125	学ぶ	132	学ぶ	146
21	考え	65	知る	97	機会	124	機会	130	学科	123	機会	123	自立	142
22	知る	65	機会	94	友達	117	最初	128	自立	117	学科	122	機会	137
23	最初	64	話	94	出来る	112	自立	128	機会	116	受ける	112	生活	130
24	違う	63	最初	91	多い	99	生活	124	最初	115	友達	112	学科	129
25	関わる	59	色々	90	自立	97	話	124	将来	103	生活	111	多い	119
26	機会	58	大切	86	最初	96	少し	122	大切	98	少し	109	最初	117
28	体験	53	先生	81	色々	96	先生	121	色々	94	最初	107	大切	116
28	話	52	グループ	80	たくさん	90	友達	120	少し	92	コミュニケーション	105	将来	113
29	たくさん	51	友達	76	学ぶ	90	将来	115	たくさん	91	たくさん	103	たくさん	110
30	聞ける	49	体験	75	少し	84	色々	115	生活	90	大切	103	話	107
集計単位(文)A		1931		3662		4023		4446		3833		4137		4783
集計単位(セル)B		965		1321		1383		1459		1272		1369		1501
A ÷ B		2.00		2.77		2.91		3.05		3.01		3.02		3.19

のように認められる。そうだとすれば、「学生の行動目標／到達目標」に掲げられている「他者との関わりを通して自己理解を深め、明星大学で学ぶ自分自身を理解すること」が、実現の度合いを高めていると推測しうる。各教室において6名を単位として構成されるグループでの「他者との関わり」の作業が、自分を知る回路になっている可能性がある。

「グループ」という語の出現頻度が上昇し、2016年度にトップ10入りした理由を、近年の中等教育におけるアクティブラーニングの急速な普及に求めることも可能であろう。中等教育機関におけるアクティブラーニングの進捗と高等教育機関での初年次教育の関係は、まさに高大接続論の具体的テーマのひとつとして、今後考究すべき課題である。

3.-2 共起ネットワーク

図1～図7は、各年度において10回以上の出現頻度を示した名詞・サ変名詞・形容動詞・同市・形容詞を抽出し、その語と出現パターンが似ており関連性が強い他の名詞・サ変名詞・形容動詞・同市・形容詞との間の共起関係を、ネットワークとして表示したものである。KH Coderで図示される共起ネットワークでは、出現頻度とエッジ（線）の数や太さでノード（丸）の重要性が示され、そのネットワーク構造における中心性の強さが表される。ノードは、図中に表示された位置より、どのノードとの間にエッジを生じているかに意味がある。図の上では近傍にあっても、エッジで結ばれていないノードとノードの間では、共起関係が低いと判断される。図1～図7では、ノード間の共起関係を強調するために、エッジ描画数を60に絞り込んでいる。ノードは、出現数が多いほど直径の大きな円で示され、灰色が濃いほど、そのネットワークにおける中心性・重要性が高く、ノード間の関連性が強いほど、太いエッジで繋がって表示されている。

以下、図1～図7の共起ネットワークについて、視覚的主観の入り込みやすいノードの大小や色の濃淡より、エッジで関連付けられたノードの連鎖に注目し、可能と思われる文脈解釈を行う¹⁴。

図1（2010年度）には、「考えの違う学生たちが互いの意見や話を聞き、自分について考え、学部や学科を越えて交流することで友人が増える、楽しく良い授業だったと思う」という反応、それとは独立的に、「人見知りで当初は緊張したが、次第に慣れてきた」という感想や、「コミュニケーションをとり相手に伝えることが大切」等の気づき

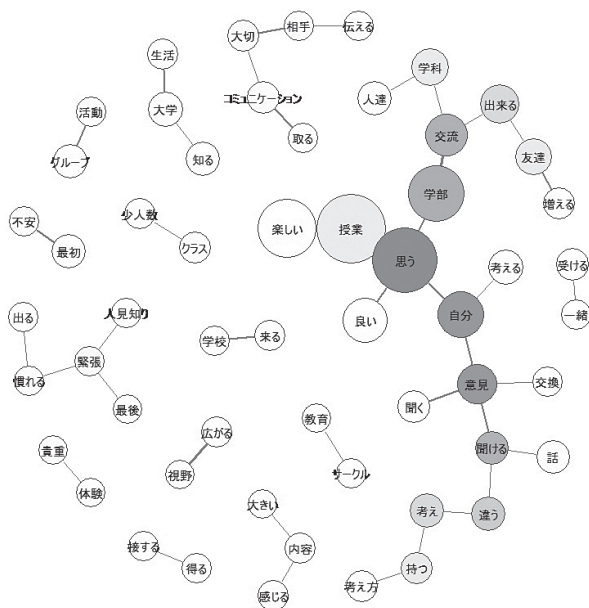


図1 「自立と体験1」の受講者感想における高頻度出現語の共起ネットワーク（2010年度）

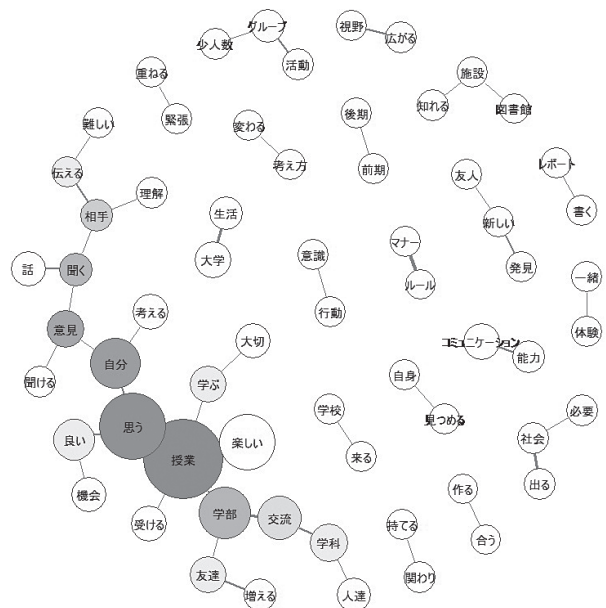


図2 「自立と体験1」の受講者感想における高頻度出現語の共起ネットワーク（2011年度）

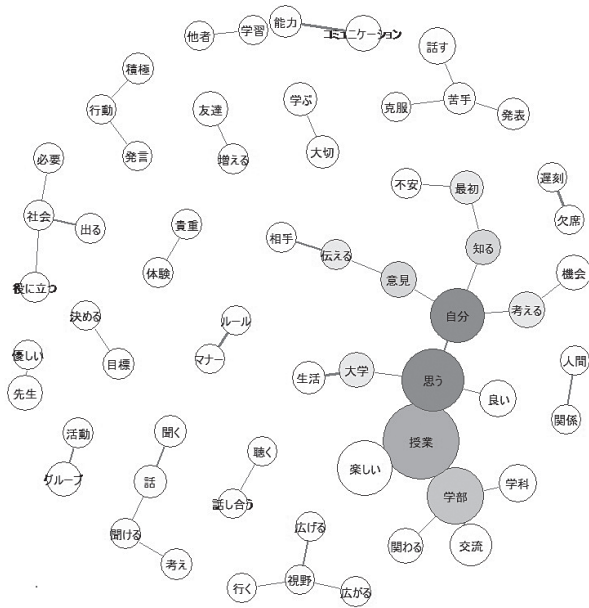


図3 「自立と体験1」の受講者感想における高頻度出現語の共起ネットワーク (2012年度)

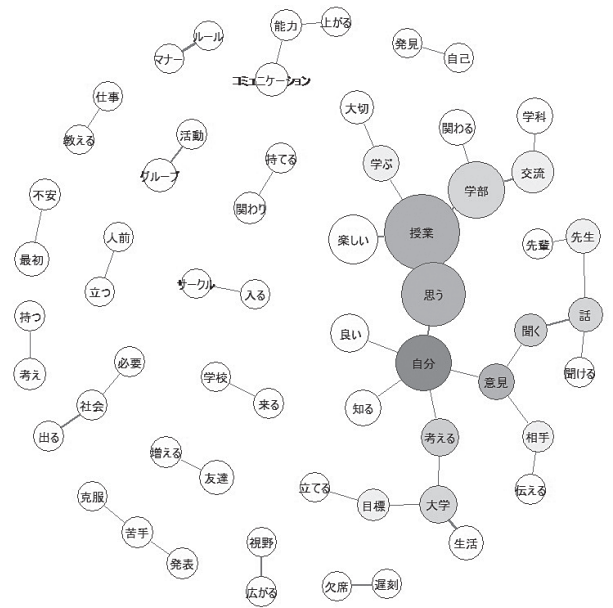


図4 「自立と体験1」の受講者感想における高頻度出現語の共起ネットワーク (2013年度)

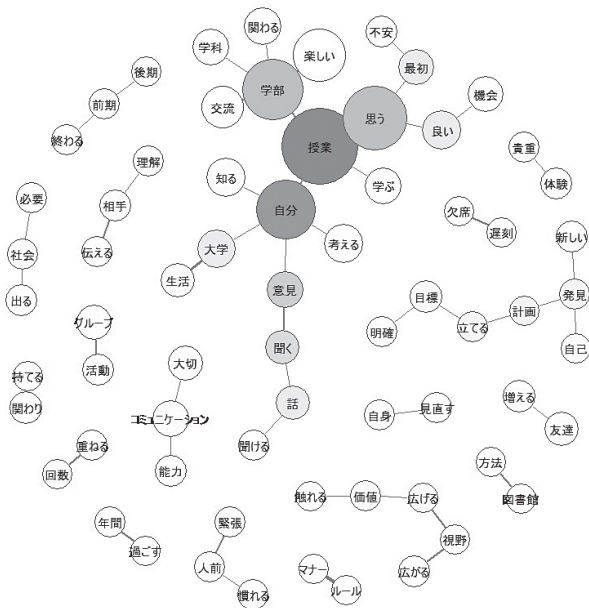


図5 「自立と体験1」の受講者感想における高頻度出現語の共起ネットワーク (2014年度)

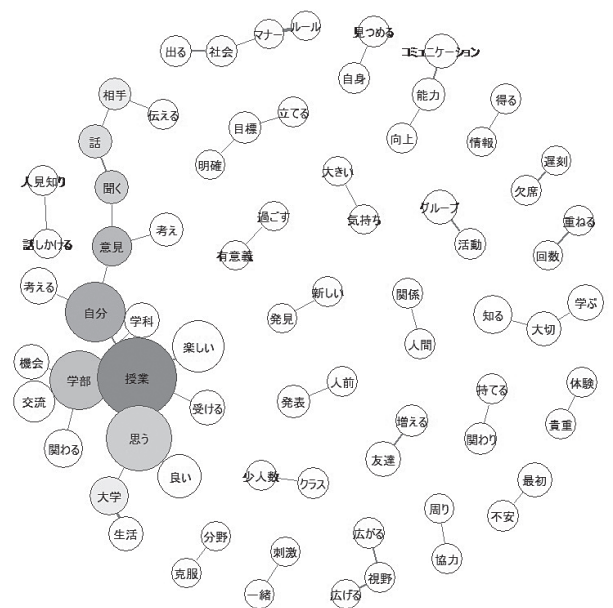


図6 「自立と体験1」の受講者感想における高頻度出現語の共起ネットワーク (2015年度)

4. おわりに

本論において筆者は、2010年度～2016年度「自立と体験1」の最終回受講生アンケートをもとに、データが何を指し示すかを抽出するために、知識発見（探索）型のテキストマイニングを試みた。そして、(1) この科目が新入生受講者の非認知能力の向上を目指し、そのための授業方法論を採用してきたことを記述し、(2) 受講者の事後感想が、シラバスに記載された科目の行動目標／到達目標、すなわち「他者との関わりを通して自己理解を深め、明星大学で学ぶ自分自身を理解する」の達成を、いずれの年度においても示している可能性があることを明らかにした。

2010年度に始まった明星大学初年次教育科目「自立と体験1」の成果評価は、百木・鈴木2014を端緒として、始まったばかりである。それに続く本論で得た知見を、この科目をめぐる今後の仮説検証（目的志向）型研究に繋げていくことが、今後の課題になると筆者は考えている。

他方、仮にこの授業の教育目標が達成されているとしても、もとより初年次教育は、あくまでも課程教育の一部であり、それだけで自己完結してよいものではない。今後控えているのは、初年次教育が全学共通教育（教養教育・一般教育）や専門教育といかなる関係を取り結んでいるのか、さらには卒業後の自立した社会生活にとり大学初年次教育はいかなる意味を持つのかなど、時間軸にそった学習者自身による学習成果評価という、より大きな課題である。それは、「高大接続」としての初年次教育と「大社接続」としてのキャリア観形成教育・キャリア教育、そしてライフロング学習への繋がりへの、大きな問いかけである。次世代教育のあり方にかかわるこの問題提起に応じて初めて、高等教育改革としての初年次教育の推進に普遍的な意義が与えられると、筆者は考えている。

【参考文献】

- 中央教育審議会 大学分科会制度・教育部会 2008 「学士課程教育の構築に向けて（審議のまとめ）」（平成20年3月25日）
- 樋口耕一 2012 「KH Coder 2.x リファレンス・マニュアル」（<http://khc.sourceforge.net/>）
- 樋口耕一 2014 『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版
- 明星大学明星教育センター 2016 『自立と体験1』明星大学出版部
- 百木英明・鈴木時男 2014 「『自立と体験1』学生アンケート自由記述欄に記載された内容の分析」明星大学明星教育センター 『自立と体験1—4年間の実践と成果』pp.35-40、明星大学
- 文部科学省 2015 「平成25年度の大学における教育内容等の改革状況について（概要）」
- 山田礼子 2013 「日本における初年次教育の動向—過去、現在そして未来に向けて」初年次教育学会編『初年次教育の現状と未来』pp.11-27、世界思想社

【参照ウェブサイト】

- <http://www.jafye.org/society/prospectus/> （日本初年次教育学会 設立趣意書）
- http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo12/sonota/_icsFiles/afieldfile/2015/01/23/1354545.pdf （文部科学省、2015「高大接続改革実行プラン」平成27年1月16日 文部科学大臣決定）
- <http://khc.sourceforge.net/> （樋口耕一「KH Coder 2.x リファレンス・マニュアル」）

【註】

- 1 中央教育審議会 大学分科会制度・教育部会 2008「学士課程教育の構築に向けて（審議のまとめ）」（平成 20 年 3 月 25 日）
- 2 文部科学省 2015「平成 25 年度の大学における教育内容等の改革状況について（概要）」。山田礼子（2013: 13）は、2007 年度に行った初年次教育に関する調査結果として、調査に応じた国公立大学 1,419 学部の 97%が、初年次教育を実施していると回答した旨を報告している。初年次教育が政策化されていたにもかかわらず、2007 年度から 2015 年度にかけて、その実施率が 97%から 94%へと減少していたことになる。調査指標等の確認が必要だが、各大学において初年次教育の中身がなお模索され流動的であったため、あるいは調査主体により初年次教育の定義が異なっていた結果、数値上の減少が生じた可能性も排除できない。
- 3 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo12/sonota/_icsFiles/afieldfile/2015/01/23/1354545.pdf
- 4 初年次教育に関し、「高等教育関係者の情報交換と研究・実践交流の場として、そしてプログラムの開発に関心を寄せる人々のネットワークとして、研究と実践の両面での拡がりと充実に貢献すること」（<http://www.jafye.org/society/prospectus/>）を目指して日本初年次教育学会が設立されたのは、中央教育審議会大学分科会制度・教育部会が初年次教育を含む学士課程教育の再構築を提言したのと同じ、2008（平成 20）年 3 月のことである。
- 5 山田 2013：13-14
- 6 データ参照にあたっては、明星教育センター事務室の協力を得た。草稿の段階で有益なコメントを下さった同事務室・御厨まり子課長に、筆者は御礼を申し上げる。また、本稿の匿名査読者は建設的な批判を寄せられた。記して感謝する。もちろん、本稿にかかる全責任は筆者に帰するものである。
- 7 明星大学明星教育センター 2016『自立と体験 1』 p.1、明星大学出版部
- 8 表 1 に登場する「合同授業」とは、普段の 30 人ないし 36 人のクラスのいくつかを集めて行う授業形態で、明星大学史などに関する大教室での学長・副学長の講話と質疑応答、小グループに分かれて学内事務組織の各部署や図書館を訪問し、インタビューや資料探索を行う授業などにおいて採用されている。そして、それらを順番に実施するための 65 クラス（2016 年度の場合）を分散させる仕組みが、授業計画表上の順序を柔軟に前後させる「ローテーション授業」である。
- 9 「質問 3」は感想のみを求めており、学習成果の測定を意図していない。質問文は、「この授業を終えての感想などを自由にお書きください。」（2010 年度、2011 年度）、「この授業を終えての感想」（2012 年度、2013 年度、2014 年度）、「この授業を終えての感想などを自由に書いてください。」（2015 年度、2016 年度）というように、「感想」という語は不変だが、多少の変化を含んでいる。また、自由記述を求める質問 3 ではあるが、その直前に置かれている質問 1、質問 2 の文言の影響を受けている可能性は排除できない。4 件法選択肢からの回答を求める問い 13 個からなる質問 1 には、「自分の意見」という言葉が 2 回、「他学部・他学科の学生との交流」、「グループでの学習活動」という言葉がそれぞれ 1 回含まれており、「ためになった」と思う授業回を選択する質問 2 には、15 回の授業テーマが印字されている。
- 10 担当教員によっては授業進行の都合でアンケート時間が十分に確保できず、短時間での回答や記載を受講生に求めねばならない場合がある。空欄回答に終わる可能性があり、アンケートに接しない最終回欠席者も含め、実答率に影響が出ている。そうした経験に基づく改善策が講じられてきた結果、2010 年度に 46.1%だった質問 3 実答率は 2016 年度には 69.5%に上昇した。今後、e-ポートフォリオなドラーニング・マネジメント・システム（LMS）が導入され、ウェブ上でアンケート回答を求められるようになれば、運用の工夫次第で、この数値をさらに高めることが可能になるだろう。
- 11 本論の先行研究として、2010 年度～2013 年度の「自立と体験 1」の受講者感想について、百木英明と鈴木時男

が高頻度出現語彙 10 項目を中心に行った統計分析を挙げることができる (百木・鈴木 2014)。百木と鈴木は、「学部学科横断型によるクラス編成」と「少人数クラスによる主体的活動」を通じ学生の交流が促進され、自らの考えを明確に表現できるようになったとし、その4年度間に、この授業に対する総合的評価が向上したと推察している (ibid.: 40)。後述するように、筆者の分析によれば、受講生は「少人数クラス」(30名程度)以上に、そのクラスを分割した6名を単位とするグループワークについて、より多くの感想を記している。

12 [https://sourceforge.net/projects/khc/files/KH% 20Coder/2.00/khcoder-200f.tar.gz/Download](https://sourceforge.net/projects/khc/files/KH%20Coder/2.00/khcoder-200f.tar.gz/Download)

13 百木と鈴木は、2010年度～2013年度の受講者アンケートの自由記述の量的変化から、「年々受講者がより多く記述する傾向」が見られることを、すでに明らかにしていた (百木・鈴木 2014: 35)。

14 共起ネットワークの文脈解釈については、樋口耕一 2012 および樋口耕一 2014 を参考にした。